



平成26年証券アナリスト第1次試験（秋試験）

解答速報！

2014/11/10 現在

【証券分析とポートフォリオ・マネジメント】

第1問（15点）

問1 B 問2 A 問3 B 問4 C 問5 B 問6 A 問7 D 問8 C
問9 B 問10 D 問11 A 問12 C 問13 D 問14 A 問15 B

第2問（30点）

I

問1 B 問2 C 問3 A 問4 D 問5 B 問6 D 問7 E 問8 C
問9 C 問10 B

II

問1 E 問2 C 問3 D 問4 D 問5 D

第3問（30点）

I

問1 B 問2 D 問3 A 問4 E 問5 A 問6 D

II

問1 E 問2 C 問3 B 問4 D

III

問1 B 問2 D 問3 A 問4 C 問5 C

第4問（35点）

I

問1 D 問2 A 問3 A 問4 A 問5 C 問6 C 問7 E

II

問1 D 問2 E 問3 B 問4 A 問5 E

III

問1 B 問2 C 問3 B 問4 D 問5 B 問6 A

この解答速報の著作権は、TAC（株）のものであり、無断転載・転用を禁じます。

TAC

第5問（30点）

I

問1 D 問2 B 問3 A 問4 D 問5 B

II

問1 C 問2 C 問3 D 問4 A 問5 B 問6 D 問7 C 問8 B
問9 A または C 問10 A

※II・問9：「レンジ相場が続く」となると教科書的にはC：投資戦略6（バタフライ・スプレッド）を選ぶのが順当なのだろうだが、「利益を得ようするとき」「最も適切なもの」となると利益そのものはわずかながらA：投資戦略4（カバード・コール・ライト）の方が大きく、損益分岐の下値レンジも広い。ただし、レンジから外れた場合の損失は大きくなる。

第6問（40点）

I

問1 C 問2 D 問3 A 問4 C 問5 C 問6 D 問7 C

II

問1 B 問2 C 問3 C 問4 C

III

問1 E 問2 B 問3 B 問4 D 問5 D

IV

問1 D 問2 A 問3 B 問4 A

この解答速報の著作権は、TAC（株）に帰属するものであり、無断転載・転用を禁じます。

なお、この解答速報は、TAC 独自の見解に基づくものであり、正解であることを保証するものではありません。また、後日情報を更新する場合がありますので、ご質問などの受付はいたしかねます。

この解答速報の著作権は、TAC（株）のものであり、無断転載・転用を禁じます。



2014 証券アナリスト 1 次試験（秋）

「証券分析とポートフォリオ・マネジメント」

過去 4 回の問題数・配点は以下の通り。

平成 25 年（春）～平成 26 年（秋）

問 題	分 野	平成 25 年 （春）	平成 25 年 （秋）	平成 26 年 （春）	平成 26 年 （秋）
第 1 問	日本の証券市場	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)
第 2 問	企業のファンダメンタル分析	15 問 (30 点)	16 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 3 問	株式分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 4 問	債券分析	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)
第 5 問	デリバティブ分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)
合 計		98 問 (180 点)	99 問 (180 点)	98 問 (180 点)	98 問 (180 点)

ここ 4 回の形式を見る限り、平成 25 年(秋)試験以外、問題数・配点は全く同じ。例外の平成 25 年(秋)試験にしてもたった 1 問多いだけで、大問 6 問への配点および全問題数 98 問が完全に定着した。各大問の内容に大きな変化はなく、あらゆる分野から一通り万遍なく出題され、難易度も従来と概ね同じレベル。よい意味で完全に「パターン化」した試験になっており、こういったコメントが本当に意味を持たなくなってきたようだ。

相変わらず、これと言って目立った特徴はないのだが、平成 26 年(春)に続いて第 6 問「ポートフォリオ・マネジメント」に連続複利の計算問題がまた出た（セクション I・問 3）。春試験同様、通常の複利計算で選択肢 C の 61.4 円をマークすると残念ながら不正解。単なる現在価値の計算なので、あまり意味のある問題とは思えないが、「連続複利（年率）」だから $100円 \times e^{-rT} = 100円 \times \exp(-0.05 \times 10) = 60.65307... \approx 60.7円$ というわけで A が正解のはず。関数電卓ではこの計算で直ちに正解できる。たった 1 問ながら、関数電卓が有利といえれば有利だろう。ただ、ありがたいことに今回の問題は、通常の電卓でも二者択一まで絞り込める。連続複利で割引計算すると、通常の複利よりもわずかながら現在価値は小さくなること知っていれば、選択肢 C の 61.4 円より小さい選択肢は A : 60.7 円か B : 61.0 円しかない。銭刻みのわずかな差なので迷うところだが、「勘が鋭い」か「運がよければ」何とかなるだろう。

以上
TAC 証券アナリスト講師室